

「黒人」たちのコンタクト・ゾーンに向けて

——米国ワシントン D.C. におけるエチオピア系移民を中心に

山野 香織

1 はじめに

1980年代以降、アメリカ合衆国ワシントン首都圏は、産業と商業の発展に伴い数多くの移民が流入し始めた。近年、ワシントン D.C. の人種・民族構成は、「黒人／アフリカ系アメリカ人」の人口が「白人」やヒスパニック系人口を上回り、総人口の約半数の割合を占めるようになった。このようなアフリカ系アメリカ人の増加とともに、1990年以降の移民多様化プログラムによるアフリカ諸国からの移民が大量に流入し、「黒人」（とカテゴライズされる人びと）の民族の多様化が進みつつある（表1）。

2000年から2005年の間に、ワシントン D.C. において「黒人」と自己認識した外国生まれのアフリカ移民の数は76,249人から114,101人へと増加しており、彼らの子どもや不法移民を含むとその数は約40万人にも上るといわれており、移民集団のなかでは最も急速な増加を示している [Habecker 2009]。2000年の国勢調査では、米国のなかでもワシントン首都圏はアフリカ移民が最も集中している都市圏であるが⁶⁾、その理由として、アフリカ系アメリカ人の人口がマジョリティであること、一流の黒人大学であるハーワード大学が存在すること⁷⁾、多様なエスニック・コミュニティが存在すること、サービス業の発展に伴い未経験労働者でも職が得やすいことなどが挙げられる [Selassie 1996:269]。

このような人種的・民族的多様性のなかで、アフリカ移民たちは他者との「接触」や相

表1 ワシントン D.C. における総人口とアフリカ系アメリカ人人口の比較⁵⁾

年代	ワシントン D.C. 総人口 (人)	黒人 (またはアフリカ系アメリカ人) 人口 (人)	黒人 (またはアフリカ系アメリカ人) 割合 (%)
1940	663,091	187,266	28.2
1950	802,178	280,803	35.0
1960	763,956	411,737	53.9
1970	756,510	537,712	71.1
1980	638,333	448,906	70.3
1990	606,900	399,604	65.8
2000	572,059	343,312	60.0
2007	586,409	321,646	55.6

相互作用を通して、いかにして自己を位置づけ、共存していくのだろうか。米国のアフリカ移民を研究対象とするにあたって、米国がアフリカ黒人奴隷制の歴史を背負い、少なくとも「白人（支配）・黒人（被支配）」という人種主義的な二項対立が残る社会であることを無視することはできない。アフリカ移民はそのような人種主義社会のコンテキストにおいて、各民族や国家のエスニック・アイデンティティを主張する一方で、「アフリカ」というルーツを共有する、あるいは「黒人／ブラック」という人種的アイデンティティを共有するアフリカ系アメリカ人との「接触」を経験することにより、時に協同し、時に対立することを繰り返しながら、米国の人種主義社会における自らの地位を模索している。

本稿は、多様な人種・民族が共存するワシントン D.C. におけるアフリカ移民が、地元の「黒人」とカテゴライズされる人びとと「接触」する社会的領域をコンタクト・ゾーンとし、そこで展開されるアフリカ移民の人種的アイデンティティの模索のプロセスを検討していく。そして、アフリカ移民のアイデンティティ戦略に関する先行研究を参照しながら、コンタクト・ゾーンのなかで生じる「黒人」たちの新たな人種・民族のかかわりを探っていきたい。研究対象として中心的に取り扱うのは、アフリカ移民のなかでもとりわけワシントン首都圏で最大のアフリカ系エスニック集団をなしている、エチオピア系移民である。

本稿のタイトルで、アフリカ移民とアフリカ系アメリカ人のコンタクト・ゾーンをあえて「『黒人』たちのコンタクト・ゾーン」と記しているのは、米国ではアフリカ移民も人種のカテゴリーにおいては“Black”と表記されることから、また彼らの接触領域を「人種主義的社会」というコンテキストのなかで検討するという本稿の主旨に沿っているからである。また、「黒人／ブラック」という用語は、アフリカ系アメリカ人自らが積極的に使用している言葉であるため、差別的な意味を含んでいないものとして受け止めている。

本稿の進め方として、まず、アフリカ移民の人種・エスニシティ研究のはじめとして、ワシントン D.C. において人類学的な視点からアフリカ移民の人種主義社会とのかかわりについて考察している L・ミシェル・ヘイベッカー L. Michele Habecker による研究を中心に上げながら、アフリカ移民の人種主義的社会におけるアイデンティティの形成について考察したい。次に、ワシントン D.C. における予備調査を元に、エチオピア系移民コミュニティを概観し、彼らのエスニック・アイデンティティの構築、および人種的アイデンティティへの模索について考察したい。

2 アフリカ移民の人種・エスニシティ研究

アメリカの人種・エスニック集団関係に関して考察する場合、1960年代に盛んになった「同化論」[ゴードン2000(1964)]と「多元主義」[グレイザー&モイニハン1986(1963)]という古典的理論への言及を避けることはできない。当時の同化理論は、各エスニック集団が白人社会へ直線的に適応・統合されていく「アングロ・コンフォーミティ」や「るつぽ論」が主流であった。その後、各エスニック集団のエスニシティは同化されず保持し続けているという「文化多元主義」の立場との論争が続いたが、いずれにしろこれら二つの

理論は、黒人も一つの移民集団として他のヨーロッパ系やアジア系の移民集団と同じレベルに位置づけられており、「人種」との関連性は無視されていた。

アフリカ系アメリカ人はいうまでもなく、アメリカ社会におけるアフリカ移民もまた、「白人・黒人」という二項対立が残る社会において、他の移民集団とは異なる社会的位置づけをされている。つまり、アフリカ移民は国家や民族に基づいた移民集団である以前に、白人アメリカ人や他の移民集団によって、対面的には「黒人」と認識され、その「被支配者」的な社会的地位を自動的に付随されてしまう可能性がある。アフリカ移民は、クリフォードがいうような「移民を統合するために形成された」米国の「同化主義的な国民的イデオロギー」[クリフォード 2002:284]の下で、たんに、「移民のプロセスとしての同化」に従ってきたとはいえない。

また、アフリカ移民に注目することによって、これまでアメリカの移民集団に関する研究で見落とされてきた、移民の適応プロセスにおける人種の側面が浮き彫りになると考えられる。それは米国における人種の二項対立的な社会を乗り越え、さらに「黒人」とカテゴライズされる人びとの多様性を浮き彫りにすることにつながるだろう。

しかしながら、近年のアフリカ移民の急増にもかかわらず、彼らを対象にした研究はいまだ皆無に等しい。ハイベッカーは、その僅かな研究のなかでも米国のアフリカ移民を対象に彼らの自己表象に関する人類学的研究における第一人者である。彼女は博士論文、*African Immigrants in Washington, D.C. : Seeking Alternative Identities in a Racially Divided City* (2009) のなかで、人種・民族の多様性をもつワシントン D.C. のコンテクストにおいて、アフリカ移民のアイデンティティ形成の分析をし、人種とエスニシティとの間で経験する彼らの戦略的な自己表象について考察している。また、彼らの「移民の統合パターン」として、一直線的な同化ではなく、集団の境界を維持しながらもそれを再定義し、(多様性を帯びたワシントン D.C. において) 文化多元主義を採用する方法を論証した。具体的には、本論文はワシントン D.C. における 6 つのアフリカ諸国 (エチオピア、エリトリア、ソマリア、リベリア、ガーナ、ナイジェリア) からの移民に焦点を当て、アフリカ移民が米国社会の人種関係のなかでいかにして自己のアイデンティティを形成し、また形成されるのかということ考察したものである。

ハイベッカーはまず、アフリカ移民のアイデンティティの発展において影響する様々な要因について、モデル・マイノリテイ⁸⁾としての社会的地位、歴史的背景、宗教、世代ごとの価値観の差異という 4 つを挙げている。そして、バルト [Barth 1969] による「エスニック・バウンダリー」の概念を用いながら、彼らのアイデンティティの社会的構成が、集団間の相互行為に基づいた主観的な帰属意識によって自己と他者の境界が決定づけられるものであるとしたうえで、それは、個々人が同様に、民族、国民、地域、人種に基づいたアイデンティティの「層」を生産することで、さらに複合的なレベルが維持される可能性がある⁹⁾と指摘する [Habecker 2009:28]。

とくに、アメリカの人種主義に基づくアイデンティティの「層」に関して、アフリカ移民はアイデンティティの選択に葛藤する。とりわけ、貧困層で犯罪率の高い集団として認識されている「黒人／アフリカ系アメリカ人」との関係性において、その葛藤は明らかで

ある。

アフリカ移民はアメリカ社会へ完全に同化することに抵抗し、外国人としてのアイデンティティを主張することで「アフリカ系アメリカ人」になることを拒む。(中略)しかし同時に、彼らはアフリカ系アメリカ人との連帯意識における「アフリカン」・アイデンティティを主張し、両者の社会的、政治的、商業的な目的を協同で達成しようとする場合もある。したがって、アフリカ移民はアメリカにおける「黒人」として同一化される認識的な罫を回避する方法として、黒人コミュニティに完全に同化するのに抵抗しようとする一方で、アフリカ系アメリカ人との戦略的な協同によって、彼らの生得的な人種的アイデンティティが強化される [Habecker 2009:9-10]。

渡米する以前まで、アフリカ諸国では自らを(白人に対する)「黒人」として認識する必要のなかったアフリカ移民は、アメリカ社会の人種主義社会にいかに関与していくのだろうか。ヘイベッカーは、アフリカ移民の「人種化」のプロセスとそれに伴うアイデンティティの形成に関して、主に3つのアプローチから考察を行っている。

第一に、アフリカ移民同士のネットワークを通して行う自己の再定義についての考察である。すなわち、彼らの移住前のアイデンティティやホームとのつながりを維持する「古い」エスニック・アイデンティティと同時に、ホスト社会におけるエスニックな組織を通して集団を再構築する「新たな」トランスナショナルな意識へのプロセスについて考察している。それは、同じナショナリティを共有する移民内部における、民族的・宗教的な組織や価値観の分析から始まる。例えば、エチオピア系移民の事例では、メディアや電話による母国とのつながりによって、母国での民族間のアイデンティティ・ポリティクスが新たな社会においても反映され継続している。

エチオピアは、アムハラという支配民族が他民族を支配してきた歴史がある。そのため、エチオピアの公用語はアムハラ語であり、アムハラの文化がエチオピア文化の代表的なものとなっている。ワシントン D.C. におけるアムハラ人と、被支配民族であったオロモや、1993年にエチオピアから独立したエリトリア人との関係は、各民族による政治組織を中心に対立が続いている。一方で、エチオピアン・レストランやエチオピア正教会のような組織は、国家集団としてのエチオピア系移民の、新たなエスニック・アイデンティティが再構築される場として機能している。このような現象を踏まえて、アフリカ移民のアイデンティティ形成は、ワシントン D.C. に到来してからのものではなく、移住以前からのホームでの歴史や政治的経験に基づいた、ダイナミックなプロセスであるのだと著者は主張する。

第二に、アフリカ移民の人種主義的社会への直面に際して、米国の人種的排除のパターンがどの程度彼らの日常生活に影響するかについて検討している。ヘイベッカーは、ワシントン D.C. の銀行で働く高学歴のエチオピア人移民(政治的亡命者として移住)が他の社員と比べて昇給がないという例を挙げたうえで、人種差別社会に対するアフリカ移民による理解の困難さについて述べている。例えば、アフリカ移民は渡米する以前から、米国

の黒人差別に関する歴史や知識はある程度理解はしているが、実際にアメリカでの生活において自らが何らかの日常的な差別を経験しても、彼らはそれを「黒人」に対して行われている人種差別だと理解しがたい。つまり、自らが受けている差別を、構造的な障壁としてではなく、克服する余地のある一時的な障害として見なす傾向にある。そのため、彼らはアメリカ社会におけるモデル・マイノリティとして自らを表現し、また白人アメリカ人との友好的な関係を維持することによって、彼らの個人的な地位を改善しようとする。一方で、彼らは、なぜアフリカ系アメリカ人がアメリカ社会のなかでより良い機会を得ようとせず、人種主義を現実を受け入れているのかと不思議に思う。ヘイベッカーは、アフリカ移民の、人種差別に対するこれらの解釈と反応が、「ネイティブの黒人」と「外国生まれの黒人」の緊迫した関係性を生み出しているのだと指摘する。

しかし、両者は互いに利益追求の手段を用いながら、政治的、商業的な目的を達成するために協力し、また姻戚関係になる場合もあり、完全に対立関係にある集団ではない。むしろ、「アフリカ移民はアメリカ黒人コミュニティへの完全な同化に抵抗することによって、アメリカ社会のなかで自らの相対的利点を最大限にするための合理的で論理的な選択をするが、同化が彼らにとって好都合な場合はアメリカ黒人と協力することもある、ということを経験することが重要である」[Habecker 2009:288] という。

そして第三に、アフリカ移民が様々な社会的状況に応じて適応させる、人種的アイデンティティに取って代わるもの、即ち「オルタナティブなアイデンティティ」に関する考察である。著者は、アフリカ移民自身がいくつかのアイデンティティの「層」を戦略的に選ぶことによって、アフリカ系アメリカ人との社会的な距離を維持することができるのだと指摘し、アイデンティティの戦略的選択の種類を3つ挙げている。

まず、ひとつ目が、母国とのかかわりを通じたトランスナショナルなアイデンティティの展開である。これにより、彼らはアメリカ社会の人種主義的コンテキストを回避し、彼らの貢献が評価され社会的地位も強化されるオルタナティブなコンテキストに重点をおくことが可能になる。

次に、アフリカ系アメリカ人と自らを区別しようとした、非人種主義的アイデンティティの強調である。これは、アメリカの人種主義的コンテキストとは関係なく、アフリカ移民の各民族集団の内部における宗教的差異や派閥に関する問題である。例えば、エチオピア人とエリトリア人の「ハベシヤ」⁹⁾アイデンティティ、ソマリ人のムスリムとしてのアイデンティティなどである。

最後に、共有された「アフリカ人」としてのアイデンティティの利用である。例えば、アフリカ移民が自分たちの民族に対する支援を要求する運動を行ったことから、ワシントンD.C.の市長はアフリカ問題を検討するための部局を設立した。アフリカ移民は「黒人」とは別の政治的な利益集団を生み出すことによって、自らのコミュニティの必要性に合うことができる [Habecker 2009:289]。だが同時に、アフリカ系アメリカ人と「アフリカン・アイデンティティ」を共有することによって、アフリカ各国の民芸品や食料品の商売、民族ダンスや音楽など芸術市場など、多様な黒人集団（アフリカ系アメリカ人及びヒスパニック系・カリブ海系アメリカ人を含む黒人と外国生まれの黒人）の文化的価値も共有さ

れる。

ヘイベッカーは、アフリカ移民のこのようなアフリカン・アイデンティティの共有における2つの側面について、以下のように述べている。

アフリカ移民のアフリカン・アイデンティティの戦略的な利用は、肯定的かつ否定的な効果をもっている。例えばネイティブの黒人と共有するアフリカン・アイデンティティの促進はブラック・アメリカの文化的風景を豊かにし、両者の集団における新たな利益的な団結を生み出すことにつながる。反対に人種的カテゴリーに抵抗してアフリカン・アイデンティティから「自ら」を区別しようとするとき、彼らはより自らの集団の必要性に応じることができるが、潜在的には、人種階級の底辺におけるアメリカ黒人の地位を補強するという犠牲を払っている [Habecker 2009:13]。

以上のように、ヘイベッカーの論文では、アフリカ移民のアイデンティティ形成に関する分析によって、各コンテキストにおけるアフリカ系アメリカ人との戦略的な離脱やつながりを明らかにし、状況に応じた柔軟性のある、流動的で、時には矛盾した、「オルタナティブなアイデンティティ」という概念を提示したことに意義がある。しかし、彼女も述べているように、アフリカ移民が「黒人になること」に対して抵抗し、自らを「黒人」から断絶することは、かえって「黒人」の劣等的な人種階級の地位を温存させてしまうことにもなる。それはワシントン D.C. という特殊な人口構成による影響も大きいのではないだろうか。つまり、ヘイベッカーによる分析は、黒人人口が白人人口を上回っているワシントン D.C. に焦点を当てているため、アフリカ移民とアフリカ系アメリカ人との対立的な関係が強調されすぎていることも否めない。

例えば、マヤ・エリザベス・バーヴェ Maya Elizabeth Bhawe による博士論文、“*Making It*”: *The Social and Economic Experiences of Ethiopian Immigrant Women in Chicago* [2001] のなかでは、シカゴに住む中産階級のエチオピア人女性が「黒人になる」までの3つのプロセスについて、エチオピア人対「非エチオピア人」という構図に基づいて分析されている。まず、第一の段階で、エチオピア人女性はアメリカ社会における人種的ヒエラルキーに馴染んでいく。すなわち、彼女たちはアメリカ社会の人種主義システムに参入することによって、アフリカ系アメリカ人が社会的に差別をされている事実を理解し、自分たちが彼ら「黒人」と同じ社会的地位として見なされうることを認識すると同時に、自らの階級やジェンダーに対する自己認識も変化する。他者によって「貧しくて教養のないアフリカ人」として見なされることは、彼女たちにとって苦痛になる。

第二の段階では、英語が堪能な彼女たちが、白人アメリカ人やアジア系、アフリカ系アメリカ人をはじめとする、あらゆる人種的背景をもつ非エチオピア人との社会関係を構築していく。彼らとの接触を通し、エチオピア人女性がアフリカ系アメリカ人男性と婚姻関係を結ぶこともある。

第三の段階で、彼女たちはアメリカ社会における人種的不平等とヒエラルキーを理解し、自らの人種的・社会的位置づけを捉えなおす作業を行う。それは同時に、「アフリカ」や

「エチオピア」に対するステレオタイプ（飢餓，紛争，貧困 etc.）を正すために，真のアフリカやエチオピアの姿を，非エチオピア人に対して示していくことにつながる。

バーヴェによると，このように，彼女たちは文化的・民族的な背景があるにもかかわらず，アメリカ社会では「黒人」として分類されることによってそれらは無視されてしまう。そのため，以上のようなプロセスによって彼女たち自身が「人種化」され，自らの歴史的背景を他者（ここでは非エチオピア人）と共有することで，アメリカ社会における人種関係に影響を与えることが可能になるという。バーヴェはそのような人種関係のダイナミクスを指摘したうえで，次のように主張している。「移民の経験は，必ずしも社会的，政治的，経済的な分析によって説明されるものではなく，……アイデンティティは社会的相互作用を通して状況的に定義されるということを裏づけている」[Bhave 2001:136]。

対象地域の特徴は異なるが，ヘイベッカーとバーヴェの分析に共通する点は，アフリカ移民が「黒人」というカテゴリーに対して葛藤しながらも，社会的相互作用を通して，状況的にアイデンティティを定義しているということである。そして，彼らの「人種化」のプロセスによって，彼らはアメリカ社会における「黒人」となり，同時にアメリカ社会への「同化」から逸脱した「外国人」となる。

3 ワシントン D.C. におけるエチオピア系移民

次に，具体的に，アフリカ出身の個々のエスニック集団，あるいはナショナルリティ集団に注目し，彼らが他者との「接触」を通してアメリカの人種主義社会に参入していくプロセスについて考察するために，筆者が調査対象としているエチオピア系移民の事例を中心にみていきたい。この章ではワシントン D.C. におけるエチオピア系移民の概要を述べたあと，ヘイベッカーが提示した「オルタナティブなアイデンティティ」の状況を踏まえたうえで，エチオピア系移民のエスニックなつながりを構築する場と，人種的アイデンティティへの意識，アフリカン・アイデンティティの共有について，具体例を挙げながら考察していく。

3-1 エチオピア系移民の概要

国勢調査によると，2007年における米国に住む外国生まれのエチオピア人は約13万人と報告されている（表2）。米国におけるエチオピア人といっても様々な移住の背景があり，

表2 米国総人口とエチオピア系移民（外国生まれ）人口の比較¹⁰⁾

	アメリカ合衆国	エチオピア出身者
総人口	301,621,159人	134,547人
男性	49.3%	49.6%
女性	50.7%	50.4%
18歳未満	73,907,975人	15,061人
18歳以上	227,713,184人	119,486人

表3 ワシントン首都圏におけるアフリカ移民の国別人口（上位6カ国）¹¹⁾

出身国	2000年 U.S. センサス (人)	2005年統計調査 (ACS) (人)
エチオピア	15,049	21,749
ナイジェリア	13,670	14,365
ガーナ	11,043	12,072
シエラレオネ	7,543	13,555
カメルーン	N/A	10,263
エジプト	5,110	5,741

それは大きく3つの時代に分けることができる。第一の集団は、1974年以前、ハイレ＝セラシエ時代における都市の学生やエリート階級（頭脳流出）である。彼らの多くはアムハラやティグレの民族で、医者や弁護士などの職をもつ者が多い。第二の集団は、1974年から1991年におよぶ軍事独裁政権による政治的亡命者と、飢餓による難民である。そして第三の集団は、1991年以降、メレス政権によって追放された反政府勢力（オロモ解放戦線など）や、1990年以降に米国で導入された移民多様化プログラムによる移民などである。

また、エチオピアは80以上の民族からなる多民族国家であるが、米国に移住した主な民族は支配民族であるアムハラをはじめ、北部のティグレ、最大の人口を占めるオロモたちである。エチオピアは20世紀初頭以降に行われたアムハラによる地方への侵略によって、エチオピア全土にアムハラ文化が浸透し、アムハラ文化は今でも国家の代表的な文化となっている。

さらに、エチオピア北部の国境に隣接するエリトリアには、エチオピア北部と同じティグレが居住しており、1993年の独立を達成するまでは元々エチオピアに併合されていたという歴史がある。したがって、エチオピア系移民という場合、1993年以前のアメリカの国勢調査ではエリトリア人も含まれているが、それ以降は別々に記載されている。ただし、ワシントン D.C. に関していうと、エリトリア移民のみのコミュニティも存在し、エチオピア移民とは政治的には確執があるものの、同じアムハラ語やアムハラ文化を共有する者として、日常的なかかわりにおいては民族的な差異はそれほど意識されていない。

このような多様な民族構成であるにもかかわらず、米国の移民集団の多くは「国家」に基づいた集団であるため「エチオピア人」としてのひとつのエスニック集団を構成する。そして母国と同じように、彼らがエスニック集団としての特徴を主張する場合、アムハラの文化的要素が集団のシンボルとなっている。ワシントン D.C. でみられるアムハラの文化的要素には、公用語のアムハラ語（文字）はもちろん、レストランや商店で売られているインジェラやワットという食料品、エチオピア正教会などがある。

ワシントン首都圏のアフリカ移民のうち、エチオピア系移民は最大の人口を占めている（表3）。彼らの多くはワシントン D.C. をはじめ、D.C. 北部と境界をなすシルバースプリング市（メリーランド州）や、D.C. 南西部と隣接するアーリントン市（バージニア州）のような郊外で居住している。アーリントン市にはエチオピア人居住者が多いことから、ワシントン首都圏のなかで最大のエチオピアン・コミュニティ・センターが建てられている。

る。また、ワシントン D.C. の繁華街、アダムズ・モーガン地区や U ストリートでは、彼らが営むエチオピアン・レストランなどが集まっており、「リトル・エチオピア」と呼ばれる商業エリアを形成している。

3-2 エスニック・アイデンティティの構築

ここでは具体的に、エチオピア系移民のエスニック・アイデンティティがどのように構築されていくのかについて検討する。ワシントンのエチオピア系移民の場合、アムハラ、ティグレ、オロモなど各民族の政治的なコミュニティは存在するものの、アメリカではむしろ他のナショナリティに基づく移民集団と同じように、「エチオピア人」という国家集団としてのアイデンティティが強調される。

そのような「エチオピア人」としてのエスニックなつながりを構築する場合は、大きく4つに分けることができる。ひとつは、エチオピアン・コミュニティ・センターや、エチオピア教会などの組織に所属しながらエチオピア人同士のつながりを維持する、フォーマルな手段である。エチオピアン・コミュニティ・センターは、渡米したばかりのニューカマーのエチオピア人が利用する場であり、住居相談、職探し、英語クラス、翻訳・通訳、パソコン教室、健康相談など、アメリカで生活にするにあたって必要なサポートを提供している。

教会はエチオピア正教会、プロテスタント系の教会などがある。1981年に設立されたエチオピア福音教会は、ワシントン D.C. のエチオピア福音教会のなかでも最大の規模を誇り、登録されているエチオピア系信者の数は約3,000人。ここでは礼拝の合間に、エチオピア母国での問題（HIV、孤児、飢餓など）を交えた牧師による説教も行われている。

2つ目の手段は、エチオピア人自身が経営する、エチオピアン・レストランや食料品店などの商業空間における、インフォーマルなつながりである。とくにレストランは地元のアメリカ人や観光客にも人気があるが、エチオピア人が集まる憩いの場となっており、不定期にエチオピア人ミュージシャンのライブが行われたり、エチオピア人向けの様々なイベントが催される。レストランのメニューが全て英語とアムハラ語の両方で表記されていることから、エチオピア人の顧客を想定していることが分かる。これらの店舗が記載されている『エチオピアン・イエローページ』も発行されており、ニューカマーであっても同郷の仲間と出会える場を見つけやすいようになっている。また、親族同士や同郷の友人同士のつきあい、近所づきあいなどもインフォーマルな手段となる。

3つ目は、エチオピアでひろく行われている頼母子講のような伝統的手段によるつながりである。これはウクブ (*iqqub*) と呼ばれ、メンバーたちが一定の掛け金を出し合い、選ばれた者が順番に融通していく互助的な金融組合である。1980年代に移住したエチオピア人男性によると、ワシントン D.C. のエチオピア人コミュニティのなかにもいくつかのウクブがあり、少なくとも100人、多くて1,000人のメンバーで構成されているという。他に、西暦とは異なるエチオピア歴での元旦（9月11日）でのお祝いや、エチオピア正教に関する祝祭なども、このカテゴリーに分類されるだろう。

四つ目は、アムハラ語で書かれた新聞や、アムハラ語番組を放送するラジオ（WUST

1120 AM, WZHF 1390など) の、「無形のエスニックな場」[Chacko 2003] によるつながりである。ヴァージニア州のフェアファックス市で毎月発行されるアムハラ語新聞、*ZETHIOPIA* は、ワシントン D.C. だけでなくロサンゼルスやダラス、アトランタ、シカゴなど、エチオピア系移民人口の多い都市でもネットワークづくりに貢献している。主にワシントンにおけるエチオピアン・コミュニティの話題を取り扱っており、求人情報やルームメイト募集の欄が掲載されている。*Ethiomed* や *Ethiopian Online Community* などのインターネット上のウェブサイトは、あらゆる場所に住むエチオピア系移民と母国のエチオピア人とも情報交換できる場である。

以上に挙げた4つの項目をみても分かるように、エスニック・アイデンティティが再構築される場合は、渡米して間もないエチオピア人にとってアメリカ社会で同胞を見つけるための手段となり、また同胞たちの憩いの場、母国や他地域に住む同胞との情報交換の場となっていることがうかがえる。

3-3 人種的アイデンティティへの意識

ヘイベッカーは、アフリカ移民のエスニック・アイデンティティの主張は、ある程度アメリカの人種的同一化に対する反抗によって、強く動機づけられているということを指摘している [Habecker 2009:27]。上に挙げたような場において、エチオピア系移民のエスニック・アイデンティティは強化されるが、「人種的同一化に対する反抗」、すなわち「黒人」であることへの反抗は、エチオピア系移民による「黒人」に関する語りから推測することができる。

彼らの人種的な同一化への意識は、主に「他者」に対して自らをエチオピア人として主張する際に生じる。ここでいう「他者」とは、彼らを外見から「黒人」と判断する可能性のある人びとのことを想定している。例えば、「他者」である筆者に対して、あるエチオピア系の女性は自らと「アフリカ系アメリカ人」との区別をはっきりと示している。以下は、そのときの彼女の言葉である。会話はアムハラ語で行われた。

夜道を歩くときは気をつけなさいよ。“この国の黒人 (*yaizzih tiquur*)” がたくさんたむろしているからね。彼らはアルコールばかり飲んでいて、ドラッグも日常茶飯事。暴力やレイプの犯罪も多いから、絶対に一人で夜道を歩いてはだめよ。私たちエチオピア人も“黒人 (*tiquur*)” だけど、彼らとは違う。私たちは家族に対してとても尊敬の念を抱いているけれど、彼らは家族でも暴力を振るうし、すぐに離婚するし、家族を尊敬していない。皆が皆そうとは限らないけれども。(女性 20代, 2006年に渡米)

筆者が交流したエチオピア系移民の多数派は、アフリカ系アメリカ人のことを語るときにアムハラ語で“トゥクル・アメリカン (*Tiquur American*: 黒人のアメリカ人)” や、“ヤ・イズイーフ・トゥクル (*yaizzih tiquur*: この国の黒人)” という呼称を用いた。“トゥクル” はアムハラ語で「黒い」という意味である。彼女は自らを「トゥクル」と表象しているものの、この場合はアフリカ系アメリカ人、つまりアメリカ社会のコンテキストに

おける「黒人」とは別の「黒人」を指し示している。

また、エチオピア系移民のインフォーマントのなかには、彼女のように、「黒人／アフリカ系アメリカ人」について語るとき、暴力、レイプ、ドラッグ、アルコール中毒といった差別的、否定的な先入観をもっていることが多い。ゲイや HIV というキーワードも、共通した彼らの先入観である。次の男性は、アフリカ系アメリカ人の元上司を嫌悪しながら英語で次のように述べた。

ワシントン D.C. に移り住んでからは建設業の仕事に雇ってもらっていた。上司は“ブラック”だった。しばらくしてその上司と揉めて、自分から辞職することになった。“ブラック”にはゲイが多い。あいつもゲイだった。もう“ブラック”の下で働くのはごめんだ。
(男性 60代, 1988年に渡米)

これら先入観を指すキーワードは、エチオピア系移民にとって「われわれ（エチオピアン）」と「彼ら（ブラック）」の境界を認識するシンボルとして機能しているといえる。

エチオピア系移民のエスニック・アイデンティティが、「黒人」コミュニティに対立しながら主張される事例は、以下のワシントン D.C. における「リトル・エチオピア論争」によって説明することができる。

通称「リトル・エチオピア」とも呼ばれているエチオピアン・レストランが密集する商業エリア、U ストリート周辺は、かつて「ブラック・ブロードウェイ」と呼ばれていたアフリカ系アメリカ人の音楽や文化が栄えた地域でもある。20世紀初頭、U ストリートは白人地主による「土地利用制限」によってアフリカ系アメリカ人の入居が禁止されたが、1910年にはそのような黒人に対する人種差別と隔離の不当を経験したアフリカ系アメリカ人によって、人種的な団結心と自尊心の促進がなされた。その後、とくに1920年代から1930年代にかけて、アフリカ系アメリカ人の住人も増していき、彼らの教会や学校、ホテルや劇場など多くのビジネスも展開された。このように、U ストリートはアフリカ系アメリカ人たちの努力によって再生された地域であり、現在でも歴史的な「黒人コミュニティ」として観光名所のひとつにもなっている。にもかかわらず、地元のアフリカ系アメリカ人はこの一部の区画を「リトル・エチオピア」へと公式に改名することに、抵抗している。

この論争は、現在もエチオピア系コミュニティによる署名活動が行われており依然として続いている。この事例ではアフリカ系アメリカ人によるエチオピア系コミュニティへの対抗意識が顕著であることも分かる。

以上のように、ワシントン D.C. におけるエチオピア系移民のエスニック・アイデンティティは、ある程度アフリカ系アメリカ人を意識しながら強化され、また主張されていくものであり、その意味で「黒人」であるという人種的同一化に対抗しているといえるだろう。しかし、そこにはアフリカ系アメリカ人によるエチオピア移民の対抗意識も存在していると考えられる。

3-4 アフリカン・アイデンティティの共有

エスニック・アイデンティティを発展させ、「黒人」であることを拒む一方で、エチオピア系移民は他のアフリカ移民やアフリカ系アメリカ人とともに、「アフリカ人」としてのルーツを共有するアフリカン・アイデンティティを発展させている。例えば、ワシントン D.C. でカフェと本屋を経営するエチオピア系移民1世の男性（1980年代に渡米）は、エチオピアだけでなく、他のアフリカ諸国の問題やアフリカ系アメリカ人に関連する書籍やDVDを中心に商品を取り揃えている。また、店内のオープンスペースでは、エチオピアのドラマの上映会や、アフリカ系アメリカ人の著作の読書会、その他様々なワークショップが定期的に行われている。

また、政治的な意味では、「パン＝アフリカ主義¹²⁾」の名の下に「アフリカ人」としてのアイデンティティが形成されることがある。例えば2009年9月に国会議事堂前の広場で、「エチオピア／アフリカにおけるジェノサイドと独裁政治の撲滅」と題された集会演説が行われた。これは、「自由への行進 (March 4 Freedom)」という活動団体によって催された集会である。エチオピア系移民の NGO 団体やジャーナリストたちによって結成されたこの「自由への行進」は、「北米とヨーロッパにおけるすべての年齢、人種、宗教、政治団体の人びとを代表する組織や個人の連盟」とされる。インターネットのサイトでは、当連盟の目的を次のように記している。

エチオピア人と、他のアフリカ人、アフリカ系アメリカ人、そしてあらゆる肌の色をしたアメリカ人、あらゆる国籍のアメリカ人が、まず人間としてともに一体となることである。特定のエスニシティ、肌の色、政治的立場、宗教、出身国、ジェンダー、見解、教育レベル、経済的階級、その他いかなる特定の人びとの集団としてではなく、正義と平和と和解について関心をもつ人びととして団結することである。そして、現在のエチオピアにおける残酷なメレス・ゼナウイ政権だけでなく、東アフリカ諸国や同じような状況が生じている国々における、全体的な人権虐待、独裁、圧迫に関して世界に関心をもたらし¹³⁾ことである。

この日の集会で焦点となった具体的な問題は、エチオピア政府により弾圧されたビルトゥカン・ミデクサ女史の解放の要求である。ミデクサ女史は、エチオピアの野党「民主主義と正義のための統一」代表として独裁であるメレス政権に異議を唱えたため、2008年に投獄され現在も捕えられたままである。多くのエチオピア人活動家のなかには、国外へ脱出することによって、このような政府による弾圧を逃れる者もいる。そして「パン・アフリカニスト」、あるいは「ディアスポラ」として他のアフリカ移民と協力し、母国の政府に異議を申し立て、同時に近隣のアフリカ諸国における非道な行為にも目を向け始めている。

4 おわりに

本稿では、ハイベッカーが提示した「オルタナティブなアイデンティティ」を踏まえたうえで、エチオピア系移民の人種主義社会への参入のプロセスと、ワシントン D.C. における「黒人」とのかかわりを中心にみてきた。そして、彼らがあるときは「エチオピア人」としてのエスニック・アイデンティティを主張し、あるときは「アフリカ人」としてのアフリカン・アイデンティティを利用し、戦略的に使い分けていることが分かった。同時に、彼らは自らを「黒人」と表象しながらも、「黒人」という人種的アイデンティティへの対抗を示している。このように、エチオピア系移民は、国家集団としてのエスニシティを維持しながらも、「黒人・白人」という二項対立的な社会的コンテクストに参入することで、常に戦略的に人種的同一化を選択することが要求される。

また、本稿では取り扱わなかったが、アメリカ社会にほぼ「同化」しているエチオピア系移民1.5世や2世のアイデンティティに関する問題、さらに、「エチオピア人」というエスニシティの枠から離脱しようと試みるエチオピア系オロモによるナショナリズム運動など、国家集団としてのエスニック集団の枠組みだけでは捉えきれない問題もいくつか残っている。これらの問題を含めたかたちでのエスニシティ分析を今後の課題としたい。

以上のように、エチオピア系移民を中心として、ワシントン D.C. における「黒人」たちのコンタクト・ゾーンに注目することによって、アメリカ社会の民族・人種の多様性が浮き彫りになるとともに、重層的かつ流動的なエスニシティの枠組みを提示することができるだろう。

注

- 1) ワシントン D.C., メリーランド州, ヴァージニア州北部, ウェストヴァージニア州極東部 2 郡を含む。
- 2) アメリカ国勢調査における「人種」の区分では、「白人」(White) に対して、「黒人」(Black) は“Black or African American”と表記されることから、「黒人」と「アフリカ系アメリカ人」は同義とされているものとする。そのため本項で「アフリカ系アメリカ人」という言葉を用いる場合、「黒人」という意味を含んでいるものとする。
- 3) 1990年の移民国籍法の改正により設けられた抽選方式の移民システム。通称“DV (Diversity Visa)”。移民国籍法203条(c)項は、米国への移民率の低い国から毎年55,000人の DV による移民を可能にしており、その約3分の1がアフリカ諸国からの移民である。このプログラムは規定の条件を満たす人に米国への永住ビザを発給し、コンピューターで無作為に当選者を選出する。
- 4) 2005年の国勢調査によると、アフリカ移民1世の人口は、1980年以前に渡米した人が全体の12%、1980年代に渡米した人が18%、1990年代で35%、2000年から2005年の間で35%である (American Community Survey PUMS. *U.S. Census 2005* より)。しかしながら、1990年代におけるワシントン首都圏への移民集団はヒスパニック系とアジア系移民が多く、アフリカ移民は全ての移民集団のなかで16.2%しか占めていなかった (*The World in a Zip Code*)。
- 5) District of Columbia-Race and Hispanic Origin: 1800-1990 (*U.S. Census Bureau*), 2007 American Community Survey (*U.S. Census Bureau*), Jesse Mckinnon 2001, *The Black Population: 2000, Census 2000 Brief*. 参照。

- 6) Sub-Saharan African (500-599), 2006 American Community Survey (U.S. Census Bureau) より。2000年センサスによると、米国におけるアフリカ移民人口は1,035,253人。そのうちワシントン首都圏におけるアフリカ移民が80,281人で最も多く、次いでニューヨークが73,851人、アトランタ34,302人、ミネアポリス27,592人、ロサンジェルス25,829人である。
- 7) 1867年に D.C. に設立されたアフリカ系アメリカ人のための大学。通称「黒人大学」。米国では一流の大学として知られる私立大学。とくに1960年代から70年代にかけて、エチオピア人の学生たちが高等教育を受けるために、この大学に憧れて渡米した [Selassie 1996]。
- 8) 移民として差別を受けながらも、他のマイノリティ集団よりも成功しているとされる社会的少数者。一般に高学歴で、経済的にも白人の平均よりも上回っている。主にアジア系アメリカ人につけられたイメージ。
- 9) 「ハベシヤ」とは、とくにセム系語族集団で古代アクスム王国に支配された人びとの子孫を指す。今日では、紀元前332年以来オーソドックス・キリスト教徒に支配されたエチオピアとエリトリアにおける、アムハラ人とティグレ人が自らのことを表象するとき用いる。
- 10) 2007 American Community Survey (U.S. Census Bureau) より。
- 11) U.S. Census Bureau ならびにヘイベッカー [Habecker 2009:298] (Jill H. Wilson によるデータ編集) によるデータにもとづく。
- 12) もともとは19世紀末、米国やカリブ海地域の黒人たちによって、自らのアイデンティティを求める運動として始まった。アフリカ諸国の人々および、他国に離散してしまったアフリカ系の人々の、解放と連帯を訴えた思想。
- 13) <http://www.march4freedom.org> (2009年9月15日閲覧) 参照。

参考文献

- ゴードン, ミルトン 2000 (1964) 『アメリカンライフにおける同化理論の諸相——人種・宗教および出身国の役割』(倉田和四生・山本剛郎訳) 晃洋書房。
- クリフォード, ジェイムズ 2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』(毛利嘉孝他訳) 月曜社。
- グレイザー, ネイサン&ダニエル・モイニハン 1986 (1963) 『人種のるつぼを越えて——多民族社会アメリカ』(阿部斉・飯野正子訳) 南雲堂。
- Barth, Fredric ed. 1969 *Ethnic Groups and Boundaries*. Boston: Little, Brown and Company.
- Bhave, Maya Elizabeth 2001 "Making It": *The Social and Economic Experiences of Ethiopian Immigrant Women in Chicago*. Ph. D. Dissertation submitted to the Loyola University.
- Chacko, Elizabeth 2003 Ethiopian Ethos and the Making of Ethnic Places in the Washington Metropolitan Area. *Journal of Cultural Geography* 20(2):21-42.
- Habecker, L. Michele 2009 *African Immigrants in Washington, D.C.: Seeking Alternative Identities in a Racially Divided City*. Ph. D. Dissertation submitted to University of Oxford.
- Selassie, Bereket 1996 Washington's New African Immigrants. In Frances Carey ed. *Urban Odyssey: Migration to Washington D.C.*. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press, pp. 264-275.
- Singer, Audrey, Samantha Frisdman, Ivan Cheung & Marie Price 2001 *The World in a Zip Code: Greater Washington D.C. as a New Region of Immigration*. Washington D.C.: Brookings Institution.
- Williams, Paul K. 2002 *Greater U Street*. USA: Arcadia Publishing.

インターネット資料

- U.S. Census Bureau <http://www.census.gov/acs/www/> 2009年9月16日閲覧。
- March 4 Freedom homepage <http://www.march4freedom.org> 2009年9月15日閲覧。